口寄せ

「いわまくもかしこきありあとじのみことをはじめこのいえのよよのみおやたちのみたまのみまえにつつしみうやまいももうさく」

今回の依頼は若い夫婦からだった。亡くなった妻の母の霊を呼び出し、妻の父親が誰なのか確認して欲しいという。所謂口寄せだ。

「それって、オレよりランボさん向きの仕事だよね。何でオレのトコに来たの？」

「もう、ランボさん行ってきたのな。」

法術あさり流本所からの依頼は、山本を経由してツナへ届けられる。ツナが本所を苦手として立ち寄らない上、最低限の連絡さえ怠るせいだ。どうせツナ、獄寺、山本の三人が揃わなければ仕事にならないし、三人のうちでは本所での修行に加えて学校の部活をしている山本が一番忙しい。山本が受けた仕事にツナと獄寺の予定がつかなかった試しもない。本来は監視員の山本の都合にツナと獄寺があわせるのは本末転倒だとは思うけれど、獄寺の面倒見役兼ツナのマネージャ

ー役を務めてくれる山本に、感謝こそすれ文句はない。

ツナの力、特定の範囲で特定の時間を巻き戻す魔法は、あまりにも強力で対象範囲が広大過ぎた。世界を滅亡させはしないけれど、宇宙生成以前まで戻すことができる。一度巻き戻ってしまったら、現在に戻るまでが面倒臭い。多元時間の流動は現生人類の感覚器官では感知出来ず意識されない。それゆえ巻き戻しに気づく者は少ないが、幾億の時間の巻き戻しと再生を繰り返せば、カセットテープのように延びたり切れたりするかもしれず、何時かは誰もが気づくことになるかもしれない。それは、個人の認識の中では並行世界を行き交い続ける人生となる。メタ的な視点から言えば、誰もが百蘭の能力を持つということ。

そして、ツナの魔法の発動には触媒として獄寺の血が必要とされる。ツナはそれを、何よりも大事なものを犠牲に供することで魔力を得ているとイメージしている。ともかく、獄寺の血が流され過ぎれば、獄寺にとって危険なだけでなく、下手をすれば際限の無い時間の巻き戻しの無限地獄が顕現する。それ故に、ツナと獄寺の接触は制限や監視が必要なのだ。

大体、本所とツナの間の連絡はもともとは獄寺の役目だった。しかし、ツナに会いたいがため

に依頼の内容を吟味せず闇雲に仕事を入れた前科により、お役御免になっている。ツナだって毎日獄寺に会いたい気持ちはあるけれど、監視員の山本の自由を奪うのは憚られるし、ツナに向かない仕事だったら時には失敗することもありうる。

例えば、建物の屋上から飛び降り自殺した者の霊をどうかできないかなんて依頼は、ツナには最も向いていない。巻き戻して自殺者が死んだという事実を抹消してしまったら死者が甦ってしまう。山本のように。

それは今から二年前の秋のことで、ツナは高一、獄寺は小六で、まだ誰もツナの異能に気づいていなかった。あさり流の本家本筋の末裔のわりに、ぱっとしない術師という評価しか与えられていなかった代わりに、好きな時に獄寺と会えた。だから仕事の依頼なんてよっぽどのことがない限り受けはしなかった。

その依頼の内容は、小学校の校庭に現れるポルターガイストを何とかして欲しい。しかし、なるべく子ども達を怖がらせたくないので、できるだけ若い術師を派遣してくれというものだった。獄寺はその小学校に通っているし、ツナは卒業している。年恰好から二人が適役だと判断されて、ツナは嫌々ながら小学校へ向かった。

ツナは獄寺と出会って以来十数年、ずっとロリコン、ショタコンと呼ばれ続けてきた。それも、このところ獄寺が大人びてきて一目では小学生には見えなくなったお蔭で下火になってきたのに、小学校に居たら小学生にしか見えないだろうと思うと足が重い。

「見て見て、十代目。このハムスター、超高速でグルグルグルグルしやがる。」

案の定、いたいけな小学生の獄寺は、ツナの手を引っ張って学校中を案内してくれるから人目について仕方がない。

「ゴックン、誰そのヒト?お兄さん?」

「違えよ、オレのボスで、オレが一番尊敬してる人!」

さすがに幼稚園や低学年の頃とは違って、『オレのこいびと!』と言い出さないでくれるようになったのはありがたい。寂しくはあるけれど。

「あっ、ここッス。山本が死んでたとこ。」

あちこち関係のない場所を連れ歩いた挙句、ようやく獄寺はくだんの校庭に出た。

「んなこと聞いてないよっ」

夕暮れの校庭に、誰の姿もないのにバッティングの音が聞こえたり、ランニングする気配があったり、ホームラン・ボールが飛んでいたりとだけしか言われてない。やけに野球好きで明るい

ポルターガイストガイストだと思っていたのに、未練たらたらな自殺霊とは穏やかでない。
「肩怪我して野球できなくなったからって、屋上からダイブしたって。アホくさ。」
「知ってる子なの？」
「クラス一緒だったんで、葬式も行かされました。」
「うーん。どうしようか。」
ツナのプランでは、術式で校庭の地勢をポルターガイスト発生以前に戻すつもりだったのだが、校庭をワイプしたところでダイブされたら元の木阿弥。山本という子が自殺したという事実を消滅しないと方がつかない。
「学校なんか、ないことにして欲しいッス。」
獄寺とツナの間で、透明なバットが空を切る。山本は素振りの練習を始めたようだ。
「ハハ。オレも小学生の時はよくそう思ってた。」
ヒュッ。
山本のスィングはキレが良く、美しかった。目には見えないけれど、ツナとて術師の端くれだ。山本の技術が卓越しているのがわかる。
「本気でプロ志望だったんだな、山本。」

「小学校の授業のソフトボールの試合なんかで本気出して、変な風に転んでぶつけて肩悪くしてんの。バカじゃねえの。」
ヒュッ。山本のバットが獄寺の髪をかする。
「山本、獄寺君に怪我させたら、君がこの世に生きた事実を消すよ。」
ツナはポルターガイストを脅した。
「心配無いッス、十代目。コイツはそんなヘマするような奴じゃねえんで。だからコイツを消さないで下さい。」
獄寺の目は空を見ていた。山本の姿が見えているのかもしれない。獄寺には術師の能力をはないが、出生直後からツナの呪具として過ごしたために、視覚聴覚が優れている。
「こうしよう、獄寺君。山本が怪我した日の体育の授業を無かったことにする。急な雨で教室で自習。いいね？」
肩を壊したポルターガイストが健康体のポルターガイストになるだけかもしれないけれど、ツナにはそれが最善に思えた。山本に今よりももっと思い切り野球練習をさせてやりたい。
「・・・ハイ。」
獄寺は首肯したが、ツナにはそれが心からの応えでないのがわかる。しかし、他にはどんなブ

ランも浮かばなかったのだ、その時は。

「手出して、獄寺君。」

目立つなと言われているので呪文は省略し、針を取り出す。獄寺も心得たもので注射を打つ前のように、袖をまくり始めている。ツナが脳内で呪文を詠唱しながら術式を発動して獄寺の手を取った時、いきなり獄寺の膝が折れた。獄寺の耳は口外してもいないツナの呪文を聴く。トランスだった。

ガクン、ガクンと片膝ずつ崩れて横転する際、獄寺はそばにいた見えない山本のバットに打たれて吹っ飛ばされ、地面にあったブロックに後頭部を打ちつけダラダラと血を噴き出した。打ちどころが悪く即死だった。

「モドレ」

ツナはその瞬間、自分が何をしたのかよくわからない。今となっては、上出来だったと思う。

気がついた時には、両手のひらにかすり傷を負って涙目で転んでいる獄寺を、山本が介抱していた。

生き返った山本は、自殺してからその時点までの中身が空っぽだった。時間にして数ヶ月に過

ぎないが、彼が死んでから今日まで生きてきた歴史が無い。不意に、突然、唐突に、この世に子どもが出現したのと変わりない。

あさり流本所で数日間昼夜を問わず続けられた喧々諤々の協議の上、山本は一旦親元へ返された。決定事項が伝えられるまで、山本は秘密裡に始末されてしまうかもしれないと思い込んでいたツナと獄寺は、常に山本を間に挟み両側から手を握りしめて、寝る時も離さなかった。山本は両手が使えないから大変だった。

山本の父親は、柔軟な思考の持ち主で、事実をそのまま受け止めた。そして、山本をあさり流本所へ託した。

「息子は一度は死んだ身ですから、このご恩はこいつが一生かけて返させて頂きます。ご奉公させてやって下さい。」

時代がかったセリフだが、ものの道理は通っている。

本所で修行を始めた山本はめきめきと能力を伸ばし、今では若手の実力者だ。本所から学校へ通い部活で野球をし、たまに親の家に顔を出す。甦った時には残っていた肩の故障は時と共に癒えた。そして、この事件以降、ツナと獄寺のコンビは要注意、要観察となった。

「ランボさんが行ってきたのなら、やることないだろ。」
ランボさんも術師の一人だ。あさり流に属してはいないが、提携関係にある組織で口寄せを専門にしている。ランボさんの能力も特殊だ。死者を自身に降ろして語らせるスタンダードな手法ではなく、あの世へ行って死者に会って聞いてきたことを話すらしい。眉唾に聞こえるが、亡くなったおじいちゃんしか知らない隠し財産とかを確実に見つけてくれる。ランボさんが言うには、あの世にそっくりさんがいるので、あの世に行ったらそいつの振りをして取材してくるんだそうだ。普段は売れない小説を書いている。時代物ばかりで、歴史上の有名人が朝晩何を食べていたとか、まんま食べログみたいな本を出していて、一部に熱烈なファンがいるが無名だ。

「何度行っても留守なんだって、お母さん。」
「マジ？」
「ランボさん、お母さん生まれ変わっちゃってますって言ってた。」
「それはないだろ。」
ランボさんが規定しアクセスするあの世には、生まれ変わりはあり得ない。バックアップデータだけが蓄積されている場所で、エネルギーとして再利用できるものはない。バッテリーとメモ

リの混同が、生まれ変わりなんてナンセンスな概念を産む。
「小さな子でもないのにふしぎー、って言ってたのな。」
例外は何にでもある。幼い子どもだけは生まれ変ることができる。子どものデータが新しい命に移動されれば、バックアップは削除される仕組みだ。
「・・・要するに、尻拭いってことかよ。」

「あわれいましみことはにじゅうはっさいをひとよのかぎりとこがらしにこのはのまいちりゆくがごとくかくりよにみまかりましぬとおきたびじにいでたちたまいしはくゆともかえらぬことながらいともかなしききわみなりいえのものうからやからがあさなゆうなにこいしたいまつるおもいではむねをさらぬにつきひはゆくみずのごとくながれたまいぬきょうのいくひのたるひにみたまなごめのみまつりつかえまつらくとみまえにみけつものをたてまつりまたときのはなをもさしそなえてむすめゆにをはじめかぞくのものまいつらなみおろがみしのぶさまをめぐしとみそなわしたまいてかぞくのものらのせつなるねがいにこたえたまえとつつしみうやまいももうさく」

神道式の呪文を唱え終えたツナは、今一集中力が欠けている自分に気づいていて、獄寺の指を刺す針を手に取らない。ツナのかたわら、座布団を並べた上に横になっている獄寺も目をキョロキョロさせている。無我の境地に入っていない。

「なんか色々腑に落ちないので、解をお伝えさせて頂く前に、疑問にお答えいただけませんか？」

ツナは祭壇を背にし、依頼人の若夫婦に相対した。解なんてまだ出せていない。この状況で心静かに巻き戻しができるわけがない。

夫婦は本当に若かった。ツナより少し年上に見える夫も若いが、妻はもっと若い。どう見ても小学生だ。ロリコンだ。犯罪だ。

「お前らに聞かせる話なんてねえな。さっさと姫の父親の名前を言って帰りな。」

夫は夫で、中高生の課外活動にも見えるツナ達三人に反感を持っている。屋外での祭りと違って今日は斎竹や注連縄といった舞台装置も無いから余計素人っぽく見える。

「ｙ、やめて下さい。こんなことは無駄だと私は何度も言ったのに。ごめんなさい、沢田さん。先に事情をお話するべきでした。」

見れば見るほど幼い妻は、歳に似あわずしっかりとした口をきいた。それでも、胸下で切り替えの入ったふわりとしたワンピース姿の妻は、少女と呼ぶより幼女が似あう。
「奥さんちっこいのな。」
山本がいきなり先陣を切ってくれた。
「はい。でもこう見えても十六なんです。」
「見えないのな」
「年上！？」
獄寺も飛び起きてユニをガン見する。
「だから、γは何も悪いことはしてないんですよ。」
そう言ってユニは腹部を撫でた。
そうか、やっぱり。
ツナは最大の疑問が解消されて、ちょっとスッキリした。妊婦幼女妻ってどんな属性ハイブリッドかと気になって気になって仕方なかった。幸い、山本と獄寺はユニのサインに気づいていないようだし。
「γは私が生まれる前、私の母とつきあっていたんです。急に私の父親は自分かもしれないと悩

み出してしまって。そんなことあるわけがないのに。」
γは羞じてそっぽを向いている。あれ？
「旦那さん、早熟なのな。ちっこい頃にお母さんとつきあってたんだな。」
山本が何のてらいもなく訊いてしまう。
「こう見えても三十二だ。」
γはムスッと答えた。
「それじゃあ、どっちにしろろり」
不用意なツッコミを入れかける獄寺の口を、ツナと山本で抑え込む。
「仕事！仕事！」
「旦那さんも若く見えるのな。」
ユニが苦笑する。ツナは獄寺を山本の手に任せて再び夫婦に向き直った。
「こんなことは無駄だと言われたのは、聞かなかったことにしておきます。
さて、これまでのお話を総合すると、奥様のお父様が誰でもないと証明できれば宜しいわけですよね？」
「はい。」

ユニはツナの提案に同意した。しかし、γは拒否も同意もできないでいる。当たり前だ。父親が誰でもないなんて常識的にありえない。

「姫、コイツらはインチキです。お引き取り願いましょう。」

(大体、妻を姫呼びすんのも痛エ)

獄寺の心の声が聞こえた気がしたけれど、ツナ自身の心の声かもしれない。

「インチキかどうかは、お話をお聞かせて頂いてから判断しましょう。」

ユニは自分の命のカラクリを知っているが、γへの伝え方がわからないのだろう。ツナは思う。あまりにも残酷過ぎて。

ツナは一度下唇を噛んで湿してから話し始めた。

「では、オレの解をお話させて頂きます。

奥様はお母様のお母様のクローン体です。つまり、お母様は自分の母親のクローンの母胎になられた訳ですね。お祖母様の遺髪などありませんか？遺伝子検査をされればはっきりします。」

γはしばらくぽかんとしてから、より幼い表情になった。安堵したのだ。自分が娘を孕ませたのではないと知ることができて。

若夫婦の家から出ると、三人はファーストフード店に入った。ハンバーガーとシェイクとコーラとポテトをしこたま買って、二階席に陣取る。
「ツナ、ユニのお母さん、やっぱあそこにいるの？」
「うん。こら、獄寺君、レタスもちゃんと食べなさい。」
「後でまとめて食います。それにしても、マトリョーシカ生命体って新しいッスね。」
「なんだ気づいてたんだ、二人とも。」

ユニがアリアを産み、アリアがユニを産む。
今のユニはあと数ヶ月の命だ。産み終えたら次の出番まであの世で待機に入る。
巻き戻しを行わずに直感で出した推理だけれど、間違いない。
実を言えば、巻き戻しをして見たくはない。怖い。おぞましい。二人が交互に生き死にを繰り返し、世界の終わりまで生存し続けるなんて、普通の感覚では理解できない。

「生まれたら死ぬのがフツーッスよね、コイツと違って。」
「オレは死んでないのな！死んでないことになったのな。」

「それもフツーじゃねえよ。」

ごめんね、二人とも。